

(6) 屠殺場

一月に『夢と狂気』が書き下ろされる。重苦しい美しさを持ち、叙述と形式において、真に精神分裂症的幻覚に恐ろしく似通った散文幻想である。[例えば、当時チェルノヴィツ州精神病院の見習い医師ヴァルター・キッパー博士が、1928年カール・クラウスに送付した精神病患者の、あの忘れることのできぬ手記に似通っている。クラウスはそれを《炬火》の781ー786号、95ー96ページに、論争的論文（《編集と精神病院から》）の枠内で印刷した。] それは呪われた種族との一種の決算書を示しており、冒頭は直ちにわれわれを父の家へ導く。

〈夕暮れ 父は白髪となった。暗い部屋の中で母の顔が石になった。そうして少年の上には墮ちた一族の呪いが重くのしかかっていた。幾度も幼い日の思い出が彼に戻ってくる。病いと怖れと闇に満ちた幼時。星の光る庭でひっそりと遊んだことがあった。宵闇が迫る中庭で鼠らに餌をやったこともある。青い鏡の中から妹のほっそりした姿が現れ 彼は死人のようになって闇へ転落した。夜 彼の口は赤い果実のように裂け 星たちが彼の無口の悲しみの上で輝いていた。祖先の古い屋敷に彼のさまざまな夢が満ちた。また彼は日暮れがたに荒れた墓地をよく通ってみたりした。あるいは薄暗い霊安所で死体をみたこともある。死者の美しい手には腐敗の緑のしみがあつた。僧院の門前でパンを乞い求めたりもした。黒馬の影が闇から躍りでて彼を脅した。冷たい寝床に横たわるときに何故か涙が頬を伝うのだった。だが彼の額に手をおいてくれる人はなかった。秋がくると

彼は千里眼者になって褐色の沃野を行つたものだ。おお 荒々しい歓びの時。緑の川べりの夕暮れよ。狩猟よ。おお 魂はすがれた葦の歌を低く歌つた 熱い敬虔に溢れて。静かに彼はひきがえるの星の眼を飽かず見つめていた。古い石の冷たさに触れて両手は微かに震え そうして青い水の厳粛な物語を彼は語つた。おお銀の魚。歪んだ樹々から落ちた果実よ。歩みは快い響きをたて 彼を誇りと人間の蔑視で一杯にした・・・〉

〈おお呪われた一族よ。汚れた部屋の中で皆の運命が終わってしまうと 死が黴の臭う足で家へはいつてくる。おお 戸外に春があつて花咲く樹でかわいい小鳥が歌っていてほしものを。だが乏しい緑は夜のもののらの窓辺で灰色に干涸らび 血を流す心臓がなおも悪を思っている・・・〉

最後にはついに、彼と彼の家族の上に裁きが襲いかかる。

〈おお腐敗に墮ちたものらよ。彼らは銀の舌で地獄を押し黙っていた。だから冷たい部屋の灯は消え 苦しみにひしがれた人間が紫の仮面の向こうから互いを見つめあつてゐる。夜もすがら雨の音がして沃野に生氣が戻つた。茨の荒れ地の中を暗い男が穀物畑の黄色い小道や 雲雀の歌や緑の枝葉のやさしい静けさを慕つて行つた 安息を得たいと思ひながら。おお 村よ 苔むす石段の道よ 燃え立つ景色よ。だが歩みは白骨のように森のへりを 眠る蛇を跨いでよろめいてゆく。耳はひたすらに禿鷹の狂おしい叫びを追いかけている。夕暮れ 彼は石の荒れ地を見つけた。死者の伴になつて父の暗い家へはいつた。紫の雲に頭を包まれて彼は無口でおのれの血と似姿のうえに倒れかかり 月に濡れる顔であつた。石となつて虚ろなものの底へ転落した。おお その時 壊れた鏡の中から妹が死にゆく青年となつて現れてきた。夜が呪われた一族を呑んだ。〉

根底で恐怖を引き起こす夢の詩作品を、フィッカーは1914年月の《ブレンナー》8／9号に掲載した。とりわけ1月1日には、詩『黙せる者らに』が現れていた。その最後の形象は、近代詩が生み出した最も偉大なものに属する。

おお 大都会の狂気よ。夕暮れがきて
黒い石垣の傍らにいじけた立木がこわばっている。
銀色の仮面の奥からは悪の霊がみつめ
灯火が磁力の鞭で石のような夜を押し退けている。
おお 晩鐘の滅び沈んだ音。

冷たい痙攣の中で死児を産む娼婦よ。
神の怒りは荒れて魔に憑かれた者の額を打ち据える。
紫の疫病。緑の眼を押しつぶす飢餓。
おお 金貨の忌まわしい笑い。

だが暗い洞穴にいて ひときわ黙した人々が静かに血を流しつつ
堅い金属から救い主の額を作り上げている。

次の数週間と数カ月は、不可解な出来事が奔流する。例えば3月15日と25日の間に、ベルリンで実際何が起きたのかは決してわからぬだろう——その空虚を満たす何通かの手紙が更に発見されない限り。即ちベルリンでは、グレートルの潜伏性の悲劇から急性の悲劇が生じていた。一切が破滅へ突き進んだ。トラークルはベルリンへ向かった。

彼の手になる二通の手紙は、ランゲン夫人が流産し病で寝込んでいたことを、不十分ではあるが説明している。3月19日、彼はK・B・ハインリヒに宛てて書いている。〈妹は数日前流産しましたが、それは異常な激しい出血を伴うものでした。彼女の状態はとても気がかりです。5日前から何も食べ物を取っていないのでなおさらです。それで彼女がインスブルックへ行くことは当分考えられません。〉そして2日後フィッカーに宛てて書く。〈かわいそうな妹は相変わらずとても苦しんでいます。彼女の人生には心を引き裂く痛ましさと同時に、雄々しい勇敢さがあります。私は時折その前で、自分が大変ちっぽけに思われるくらいです。彼女は多分私より千層倍も、善良で高貴な人々の輪の中で生きるに値したのです。これほど法外な苦しい時代には、私に許されていなかったような輪の中で。——まだ何日か私はベルリンに留まろうと思っています。それというのも妹は終日一人きりで、私がいればやはり多少は彼女の役に立つからです。〉

トラークルは《嵐》の発行者ヘルヴァルト・ヴァルデンのサークルで（そこにグレーテと彼女の夫も出入りしていた）、ヴァルデンのものと夫人エルゼ・ラスカー・シュューラーと知り合った。この偉大な女流抒情詩人の詩句を信じてよければ——彼女は都合3編の詩をトラークルに書いている——両者は宗教についても議論した。《しかし常に2人の遊び仲間のように》。トラークルはヘルダーリンの強い影響を受けている詩『黄昏の地』を彼女に捧げたが、その第一節は次のようになっている。〈月はまるで死者が／青い洞穴から現れるようだ／そうして花々がしきりに／岩の小道に散る。／夕暮れの池のほとり／病者が銀色に泣き／黒い小舟で／愛をわかつ者らが死の旅に立った。〉

他には、トラークルが陰鬱このうえない気分でインスブルックに到着したことだけがわかっている。駅を出ると、彼は《ブレンナー》スタッフに属する画家、マックス・フォン・エステルレのアトリエに赴いた。この芸術家は詩人の戯画を雑誌に描き、詩人の蔵書票もデザインしていた。それは重荷の下で打ちひしがれたように手で頭を支え、食卓につく一人の男を表している。この描写はトラークルの詩句を考えさせる。〈秋の星々の下で身震いしながら／年々頭は深く傾く。〉

さてフィッカーの報告によると、エステルレのアトリエで夜中、トラークルは何かに驚き眼を醒ましたとき、絵筆を握り、鏡でみた通りの自分を描いたと言われている。目、口それに鼻は暗い洞穴、顔は腐敗しているようで大部分が青緑色、頬には緋色の痣がある。口は裂け、声にならぬ叫びをあげているみたいだ。額には赤茶色の絵筆の線。髪と僧衣に似た衣服は褐色、背景は黄緑になっている。この絵はもともと細い縦長のもので、そうであれば茶色の懺悔服は見栄えがもっとしただろうと、フィッカーは述べている。フィッカーの日付によると、この肖像画は、妹の見舞いで疲労の残っていた1914年3月終わりにできた。しかしそうであるなら、ハンス・リンバッハがどうしてそれをすでに見たのだろうか？彼は前述した報告の中で、この絵を正確に記述している。リンバッハは1914年1月、カール・クラウスの朗読を聞きに南チロルからダラゴと一緒にやって来て、インスブルックを短期間訪れていたのである。

ひょっとするとトラークルの恐ろしい抑鬱状態を更に悪化させたのかもしれないが、この時期、大変な資産家で文学に勤しんでいた以前の学友が、詩人の金銭的援助の願い出を、丁重なかからかいの言葉で拒絶した。屈辱的手段をトラークルが決心したのは、ベルリンで孤独な生活を送る妹の困窮を軽くするためだった。この拒絶はトラークルを深く傷つけ、試しにシラー・財団へ金銭的援助の申請を提出してみてもという友人たちの催促にもかかわらず、他のすべての努力も見込みがないものと諦めたのである。あの苦しい4月と5月の日々には、イタリア旅行の途中で丁度インスブルックに滞在していたテオドール・ドイブラーとの散歩や会話、それにフィッカーとのトルボーレのカルダ湖畔へのハイキングが唯一の楽しみだった。絵のようなガルダ湖・地方での静かな、平和に満ちた夕べを回想し、彼は友人で助言者フィッカーに捧げた9行詩『捕らわれたつぐみの歌』を書いたが、それは慰安的・救済的形象で終わっている。〈かがやく憐みの腕が／破れ砕ける胸を抱く。〉

5月に題名のない戯曲断片が成立する。そのすぐ後、部分的にはこれと照応する、ようやく死後1915年《ブレンナー》・年報で公にされた散文『啓示と没落』ができる。このトラークルの最後の散文詩と戯曲断片は、単に気分の点で多くの一致するものを持つばかりではない。若干の本文が対応しているのも、両作品が内面的に関連していることを証する。例えば次の通りである。

戯曲断片

〈黒い茨よ 刺せ……。ああ 激しい嵐の銀の腕がいまも響いている。だが夜の道では何と白くなってしまうことか。おお 中庭の鼠たちの叫び 水仙の香り。薔薇の春が痛々しい眉に巣くっている……。動物が喉をあえがせて建物の中へ押し入った。死！死！……〉

〈……。おれは森でおれの黒馬の首をへし折り そのとき狂気が奴の紫の眼から飛び出してきた。楡の影がおれにかぶさってきた。水が青く笑う。夜と月の光！どこにおれはいるのか。おれは甘いまどろみの中へ押し入る おれには銀色の狩人が二人つきまとう！見も知らぬ辺り おれの周りに夜の帳がおりる……。〉

後の散文

〈……。腐敗してゆく青の中から妹の青白い姿が現れ そうして彼女の口は血を流しながら 茨よ刺せと私に語りかけた。ああ 激しい嵐の銀の腕がいまも私の耳に響いている。血よ 月に照らされた足から流れ 鼠が鳴きながらかすめ走る夜の小道に花を開け。私の弓をえがく眉の中に星たちが煌めき立つ。心臓が夜の中で微かに音をたてる。炎の剣をかざして赤い影が建物の中に押し入り 雪の額となって遁走した。おお 苦い死……。〉 〈……。そうして私の内部から暗い声が おれは夜の森でおれの黒馬の首をへし折り 奴の紫の眼から狂気が飛び出した と語った。楡の影が私にかぶさって来た。湧き水が青く笑う。夜の黒い冷氣よ。私は荒々しい狩人になって 雪に眠る獣を狩りだすのだった。石の地獄の中で私の顔が死んだ……。〉

ヨーロッパの破局が襲いかかる少し前、トラークルの状態、少なくとも彼の物質状態は、突然好転するように思われた。ルートヴィヒ・フォン・フィッカーは7月中旬、ある芸術保護者から10万クロネを受け取り、尊敬すべき貧しいオーストリアの芸術家に分配するよう頼まれていた。フィッカーはその内から差し当たり、リルケとトラークルにそれぞれ2万クロネを分配した。このかなりの額は、トラークルの生存を何年間かは保証したことであろう。

気前のいいこの寄付者は、当時フィッカーに未知の人間だった。彼の名はルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインで、ケンブリッジのバートランド・ラッセルまたイェーサのゴットロープ・フレーゲのもとで哲学と論理学を学び、世界観は《ヴィーン派》に近か

った。大金持ちの父を持つ息子たちの一人として、父の死後、相当の財産が手にはいつていた。そこで、かなりの額を有益な目的に使うのは――と彼はフィッカーに書いている――慣行だった。後に有名になった《論理哲学論考》（1921年と1922年）の著者は、提案された詩人の選択にすぐ同意していた。彼はリルケの作品を知っていたが、トラークルの作品は知らなかった。トラークルの作品を知った時、彼は率直にこう白状した。《私はこの作品を理解できません。しかしその音調は私を幸せな気持ちにします。これは真に天才的人間の音調（トーン）です。》

奇妙な事情の連続で、戦時志願兵ヴィトゲンシュタインは、彼の恩寵を受けるトラークルとクラカウの宿営地で間髪知り合うところだった。即ち若き哲学者は、軍司令部クラカウに配属されていたが、トラークルが10月の終り頃クラカウの衛戍病院15号室の精神科病棟に収容されていた時、ヴァイクセル川舟に乗って偵察行に出ていたのである。トラークルはフィッカーに事情を教えられ、ヴィトゲンシュタインにまだ手紙で病院へ自分を訪ねるよう頼んでいた。この野戦葉書は、恩人に宛てた詩人の唯一の消息として残ることになった。トラークルの死後3日経て、ヴィトゲンシュタインはクラカウの司令部へ戻った――しかしその時、詩人はすでに葬まれていたのである。

トラークルはもはや贈り物を享受するには至らなかった。彼がフィッカーを伴い、インスブルックの銀行で預金の一部を引き出そうとした時、突然不安に襲われ、汗びっしょりになってその場を逃れたのである。その金については、後に別の使い方を頼んでいる。死の6日前の10月27日、彼はフィッカーに宛てて書いた。〈最後になお付け加えたいのですが、私が死んだ場合、お金やその他の物など私が所有している一切は、私の愛する妹グレーテの所有になるのが私の願いであり意志だということです・・・〉

7月28日、オーストリア・ハンガリーはセルビアに戦線布告した。王位継承者夫妻の暗殺後、最高潮に達していた神経質な緊張が、突如として軽はずみな勝利の確信に道を譲った。8月1日、ドイツ帝国はロシアに宣戦布告し、24時間後、フランスへの戦争通告が続いた。8月4日、イギリスはドイツに対する諸関係を断絶し、8月6日、ロシアに対する君主国の宣戦布告が続いた。一週間の内に前ヨーロッパが炎に包まれたのである。

トラークルは初めの内は戦争を内面的に肯定したように見える――勇氣あるいは傲慢からではなく、戦争によっておのれの苦境の終わりを、ひょっとすると終末一般を期待したからである。また彼が皇帝に忠誠を誓う、愛国的市民家族の出身であり、熱狂的陶酔感に染まっていたことも忘れてはならない。政治並びに政治の経済や社会構造との複雑な絡み合いについて、彼は一つとしてわかっていなかった。このことは、彼の素朴な・一般化された言葉の多くによって証明される。だから兄弟のグスタフやフリッツと同じく、彼が心から同意し動員令に従ったのは当然すぎることだった。

8月24日、トラークルは昔の薬剤士官補の階級で、衛生縦隊とともにインスブルックから戦場へ移った。フィッカーは明るい、静かな月夜だったと回想している。《その時トラークルは、別れの会釈のたびに殆ど幽霊じみて一緒に揺れる、赤いカーネーションを帽子につけていたが、インスブルックの中央駅から家畜運搬車に乗り込んだ。その車両はピンピンしていた彼を、このとき朗らかだった男を、永久にわれわれから奪い去ってしまった。》ほんの少し前、トラークルはこの友人に黙って――《個人的位置づけを思わせる》――手記を手渡していた。〈死に似た存在の瞬間における感情。すべての人間は愛に値する。目覚めながらおまえは世界の苦さを感じる。その中におまえの解かれぬ一切の罪がある。おまえの詩は不完全な贖罪。〉フィッカーが尋ねるように眼をあげた時、彼はこう付け加えたと言われる。〈しかし勿論――いかなる詩も罪に対する贖罪では有り得ません。〉それ以後10月終わりまでトラークルに何が起きたのか、当時当たり前の僅かな野戦葉書の報告から再構成されるにすぎぬ。8月26日、彼はまだヴィーンからフィッカーに宛てて手紙を書いていた。しかし次の葉書はすでに野戦郵便番号65となっている。詩人はすでに出版されていると思い違いしていた詩集『夢の中のゼバスチャン』について、二度問い合わせている。それから更に帝国（k. u. k.）

野戦病院 7 / 14 と表刷りのある（日付なしの）葉書がくる。〈今日ガリシアへ出発します。私たちの本来の行き先である駅にはほとんど一時間も停車しませんでした。汽車の旅は特別素晴らしいものでした。私たちは多分まだ3日間は汽車で過ごさねばならないでしょう。〉

ガリシア！ここで、しかもこの帝室直属地の東部で、帝国司令部は戦闘行為の開始早々、二つの壊滅的敗北を忍ばねばならなかった。完全に無能な騎兵将軍の最高指令下にある第3軍、それに第2軍は、8月26日と30日の間、ロシアの《蒸気ローラー》によってレムベルクの周囲に密集を余儀なくされ、グローデク・地区まで撃退させられていた。レムベルクは9月1日明け渡された。この前線におけるロシアの数による、また戦略的優勢は全く疑いを入れる余地がなかったにもかかわらず、参謀本部長男爵コンラート・フォン・ヘッツェンドルフは、その街を奪還する目的で攻撃作戦開始を命じた。この威信・攻撃は多くの血を犠牲にし、新たな失敗、いっそう悪い結果に終わった。向こう見ずの命令による攻撃から、全面的退却となったが、ロシアの追撃が緩やかだったので、どうやら潰走にまでは至らなかった。9月11日ローートラークルの野戦病院は部隊と一緒に移動したようだローートラークルは前線をカルパチア山脈、ヴィスロッカの背後へ撤退した。これによって東ガリシアは適の手に落ちたのである。

戦争行為はトラークルの詩『人類』の中ですでに予見的に告知されていた。

人類は砲口に向けて立たされている
軍鼓が轟く 黒い兵士たちの顔
足音は血煙をあげ 黒い鉄具が響く
胸を覆いゆく悲しみの暗夜 絶望・・・

今やこの幻想は最も身の毛のよだつ現実になっていた。そしていわば砕け散ったヘルダーリン的鏡の中で宣言されたのである。

東方にて

冬の嵐が狂おしく叫ぶように
民族の暗い怒りが沸き立ち
戦いは紫の大波をあげる。
星が簫々と揺れる

潰れた眉と銀の腕で
死にゆく兵士らを夜が招く。
秋のとねりこの樹下
斃れた者らの霊が歎息する。

街は茨の荒れ野に囲まれ
月が血に濡れる階段から
怖れおののく女らを追いたてる。
狂った狼らが門を突き破る。

トラークルの戦場からの報告は、軍検閲のため簡潔で生彩のない内容だった。母親にローーそれは彼女への彼の最後の音信となったローー彼は書いた。〈この一週間、私たちはガリシアをあちこち歩き回り、いままでまだ何もすることがありませんでした。〉フィッカーに宛てて。〈私たちは4週間緊張して全ガリシアを行軍しました。私たちは2日前から、なだらかで明るい丘陵地の真只中、西ガリシアの小さな街に休んでいます。最近の色々な大事件の後で、この平和な気分は、私たちを元気づけます。明日か明後日、私たちは更に行軍してゆくでしょう。〉そして今や、詩人が実際体験していたことについて、かなり多くのことを表す文章が続く。〈新たな大戦闘が準備されているようです。

天が私たちに、今度は慈悲をたまわらんことを。〉アドルフ・ロースも――10月中旬――ほんの数行だが、多くを語っている野戦葉書を受け取る。〈全ガリシアを通る数カ月の十字遠征の後で、私はあなたに心からの挨拶を送ります。私はここ二三日まさしく病気でした。言うに言えない悲哀を前にしているようです。今日は私は陽気です。私たちはほぼ間違いなく北へ行軍し、ひょっとすると数日でもウロシアへ進入するでしょうから。クラウス氏に呉々も宜しく・・・〉

10月中旬、チロルの軍医が詩人にいつときだけ会っていた――宿営地のリマノヴァで。《多くの隊、野戦病院患者、收拾し難いほど》と、後にこのフリードリヒ・プラー博士は彼の印象を模写した。《あるユダヤ人の金でやりくりされていた旅館。そこで私はトラークルと知り合った。彼は多少腫れぼったい、落ち着かない様子に見えた。声は嘎れていた。彼は野戦病院には住まず、私室を借りていた。》文学について話をし、トラークルは戦友にヴェルレーヌとランボーを奨めた。《彼は・・・非常にいい気分だった。私にはただ一般的な暖かい全体的気分が残っているだけで、それ以上の個別的なことについては何も残っていない。》

10月の終わり頃、突然フィッカーのもとに、まことに不吉な報告がクラカウから届く。葉書には〈衛戍病院15号室、5科〉と、場所が記載されている。〈尊敬する友！私は5日前から精神状態鑑定のため、ここの衛戍病院にいます。私の健康は恐らく多少害されています。そして本当にしばしば、私は言うに言えない悲哀の中へ落ち込みます。望むらくは、意気消沈したこの日々がすぐにも過ぎ去りますように。あなたの奥様とあなたのお子さんたちにどうぞよろしく。どうか私に二言三言、電報を打って下さい。あなたから知らせを受け取るのは、たいへん嬉しいことでしょう・・・〉

《この葉書で》と、後にフィッカーは言った。《明らかになったのは、友人の音信が一通も戦場のトラークルに届いていないことだった。私はクラカウへ旅だった。》

フィッカーは彼の回想書の中で、あの2日間の訪問（1914年10月25日と26日）を非常に正確に記述した。患者（あるいはそういう扱いを受けている者として）との会話で判明したのは、彼が重い、前線で受けたショックの影響下、戦友たちによって失敗させられはしたものの、自殺を企て、その14日後――丁度リマノヴァで――クラカウ衛戍病院へ派遣されていたことだった。最初想像していたように、薬剤師としての勤めを果たすためなどではなく、彼の精神状態の鑑定のためだった。

グローデク一帯の戦闘に、トラークルの衛生縦隊は最初に配置されていた。医者への援助もなく、彼はリュネクという大きな広場近くの納屋で、百名の重傷者を看護しなければならなかった。二日二晩、彼はひどく苦しむ者たちの呻きや悲嘆以外、何も聞かなかった。再三再四、彼はあちこちから苦痛を終わらせてくれと懇願された。弾丸が膀胱に命中していた一人の男は、トラークルの目の前で自分の頭を撃ち抜いた――血塗れの脳髓の一部が壁にこびりついた。その時、彼は目の前が暗くなり、戸外へ転げでた。しかしそこには、葉の落ちた不気味な樹々が空に向かって聳え立ち、どの樹にも絞首刑にされた者たちがゆらゆら揺れていた――ルテニア人で、スパイあるいはロシアびいき（ラッソオフファイル）として処刑されていたのである。トラークルが人から聞いたところでは、順番が最後に回ってきた男は、自分で首の周りに縄を巻き付けたということだった。

退却中、ある村での夕食時、この地獄の幻覚に苦しめられた彼は突然跳び上がり、おれはもうこれ以上生き続けることはできないという言葉で転がるように飛び出したが、戦友たちが彼から武器を奪い取った。〈私は恐れています〉と、彼は今やフィッカーに述べた。〈あの事件のため、軍法会議にかけられ処刑されることを。臆病、つまり敵前における勇気喪失です。私はそのことを覚悟していなければなりません。〉そして彼はこの気違いじみた考えに固執した――その雰囲気は余りにも脅迫的だったし、不気味でもあった。彼の部屋は精神科・病棟の一階にあったが、監房そっくりだった。彼は自分を患者としてでなく、犯罪者と感じていた。上の階から狂人たちの叫びが突き抜けて

きた。そして同室者は振戦譫妄に苦しんでいるヴィンディシュグレッツ・軽騎兵の少尉だったが、これがそういう一切を更にいっそう耐え難くしていた。唯一の彼に近い魂は、彼の当番兵マチアス・ロートで、ハルシュタット出身の鉱山労働者だった。この当番兵は毎晩、彼の寝台の足もとの床に寝ていた。

上に示されたように、トラークルのさまざまな神経症的不安は、全く理由なしというわけではなかった。病院の司令官、ニコラウス・トーマンというチェコ人の軍医少佐は、フィッカーが患者の引き渡しを願い出たとき、無愛想な態度を取った。そしてトラークルを鑑定していた助手のポーランド人軍医は、この《天才と狂気》の症例に特別興味を抱いていると説明した。何しろ彼は、手紙の検閲で詩人の詩句を読み、それが不気味に思われていたからである。

翌日トラークルは無感情になって、物思いに耽った。〈私が戦場で書いたものをお聞きになりますか——ほんのわずかですが。〉そして鉄の寝台に横になったまま、友人に二つの深い感動を与える詩『嘆き』と『グローデク』を読み聞かせる。一方ヴィンディシュグレッツの軽騎兵は寝台で不機嫌げに、また退屈そうに壁の方を向く。それから彼はレクラム・本——ヨハン・クリスチャン・ギュンター、《荒々しい》ギュンターの詩集——を手に取り、低い心に徹する声で、この天才的バロック抒情詩人のひどくペシスティックな詩節を二つ三つ語る。生の悲劇性において、彼はトラークルに似ており、若くして死んだ。これらの詩の一つは《しばしばいい死こそが最良の履歴だ》という行で終わっている。

フィッカーは不安な気持ちで別れを告げた。それというのも、トラークルが致死量の毒物を隠し持っていることが彼にはわかっていたからである。フィッカーは彼を慰めて言う。私はあなたがすぐにヴィーンからインスブルックへ移れるよう働きかけてみましょう。彼が《すぐに再会することを約束して》友人から別れるとき、トラークルは身動きもせず、一言も言葉を返さない。《ただじっと私を見つめた。そうして相変わらず私を見送っていた……私は決してこの眼差しを忘れないだろう。》

さらに2通の（10月27日の日付）トラークルの手紙と、一枚の野戦葉書がインスブルックに届く。一通の手紙に——ソネット『悪の夢』の改作された初めの節と並んで——1911年の本来6節詩『人間の悲惨』の新しい4節草稿が同封されており、トラークルは表題を『人間の悲哀』に変更していた。奇妙なことだが、この2番目の最終的な、多くの点でより優れた草稿は（その中には驚くべき、ガリシアの屠殺場の狂気の雰囲気から受けた形象が見いだされる。〈あれはこうもりの叫び声であろうか／庭で棺を拵える鋸の音も聞こえる〉）、ようやく『詩作品集』の第4版（1939）に採り入れられた。

2通目の手紙は、次のような文章を含んでいる。〈あなたの病院訪問以来、私は2倍も悲しい気持ちです。私はすでに自分がこの世界のあちら側にいるように感じています。〉2つの詩が同封されていた——トラークルの手になる最後の詩で、今や最後の平静さと結びついたものだった。

嘆き

眠りと死。暗鬱な鷺が群がり
夜通しこの頭蓋のうでで羽ばたく
人間の金の姿も
永遠の凍る大波に吞まれてしまうと
脅かしつつ。恐ろしい暗礁に砕け
紫の肉体が飛び散る。
暗い嘆きの声が
海原をおおい

おお 嵐の憂鬱の妹よ
小舟が翻弄されて沈んでゆく
星空のした
夜の沈黙する顔に見守られつつ。

グローデク

夕暮れに秋の森が響きわたる
死の砲火に包まれ。金の野や
青い湖を超えて太陽が沈み落ちる。
ひとときわ昏く落ちて夜が抱く
死んでゆく兵士を 惨い嘆きを
洩らす砕かれた口を
おお柳の茂る谷で
怒れる神が住む赤い雲が
流れた血を啜っている。月の冷氣。
街々は黒い腐敗の中に落ちて
夜の金の枝と星の下を
妹の影が黙す杜を通してゆく
勇士らの霊と血に濡れた亡骸を吊いつつ。
秋の暗い笛が微かに葦の中で歌う。
おお 気位高い悲しみ 青銅の祭壇よ
大きい苦しみがいま精神の熱い炎を育む
生まれていない裔の者らを。

トラークルが詩『嘆き』の全体を、また『グローデク』の最初の6行を、彼の青春期のラテン字体で（鉛筆で）書いていたことが目を引く。多分読みにくい走り書きで、ドイツ人ではなかった軍検閲の役人たちにしばしば不愉快な気持ちを起こさせないためであろう。

トラークルは野戦薬書を、同様に日付がないが、フィッカーの訪問前に書いていた。フィッカーは、詩人がそれを読むようにと見せたことを思いだした。〈・・・私は今までまだいかなる消息も受け取っていません。だからあなたが私の野戦薬書を受け取っていないのだと想像しています。私はこのクラカウ衛戍病院に14日間滞在した後、ここを去ります。私がどこへ行くのか、まだわかりません。私の新しい住所をできるだけすぐにお伝えするつもりです・・・〉トラークルはいかなる動機でそれを郵送したのだろうか？びっくりして、フィッカーは薬書を裏返した。そこには見知らぬ筆跡の読みづらい署名があった。《トラークル氏はクラカウ衛戍病院で突然死去されました（麻痺？）。私は彼の隣室の者でした。》その薬書の消印はプラハー―1914年11月9日となっていた。

トラークルの死について詳細を問い合わせるとオーゲオルクの異母兄ヴィルヘルムが、クラカウの衛戍病院宛にそうしていた―そこから次のような情報が帰ってきた。《・・・あなたにお伝えします。あなたの弟、薬剤士官補ゲオルク・トラークルは、この病院で精神障害のため（早発性痴呆症）治療を受けていましたが、11月2日夜コカイン服毒（彼はその薬剤を多分、以前働いていた野戦薬局から持ち出して、保管していたのでしょう。入念に検査したにもかかわらず、何も発見されませんでした）による自殺未遂を企て、可能な限りのあらゆる医学的手当にもかかわらず、もはや救出することはできませんでした。彼は11月3日、午後9時死亡しました。そして当地のラコヴィッツ墓地に埋葬されました。クラカウ、1914年11月15日、ドクター・・・（軍医大尉）。》

その日付けは、病院の死亡名簿と正確に一致する。ただポーランド人の書記は、トラークルの代わりに《フランクフル》と理解していたし、年齢欄に27歳の代わりに《37》

と記入していた。

トラークルの埋葬には、彼の忠実な当番兵、あの鉱山労働者マチアス・ロートだけが居合わせた。彼によって愛と人間性の感動的な記録が残された――まるでここでは、トラークルがその人生において親切だったすべての単純な人間たちが、心からの謝辞で彼に別れを告げようとしているみたいである。フィッカーが言うように、その手紙は《心の正書法の美しい形象》だが、フィッカーに宛てられていた。それには小さな時間の誤りがある。フィッカーは書いている。《トラークルは当番兵を部屋から立ち去らせる指令を、すでに11月2日の（ようやく3日にではなく）夕方出したに違いない。それというのも、ロート自身語っているように、トラークルは丸一日（まさしく11月3日中）意識を失って横たわっていたからである。医者や看護人は、当番兵に独房への入室を禁じていた。しかしロートはまだ11月3日の夕方、覗き穴から、仰向けに体を伸ばし目を閉じて横たわっている主人の心臓が、相変わらず力強く打っており、彼の胸が苦しそうに波打つのを認めることができた。その次の朝になって、ようやくトラークルの苦闘は終わっていた。彼の死体は亜麻布をかぶせられ、ベッドに横たわっていた。》

ロートの手紙は言っている（要約）。《・・・すなわち私のご主人はいつも私にお情けをかけて下さいました。だから私は生涯、決して彼を忘れないでしょう・・・私がもっと早くあなたの尊いお名前を知っていたら、彼が二度と醒めぬ眠りについたとき、すぐにもあなたに電報を打ちましたでしょうに・・・私はいつもいつも私の尊い愛すべき善良な主人のことを考えます。彼はこんなにも悲惨に、またこのような方法で滅びねばならなかったらどうかと？3日の夕方、彼はまだ大変元気で、まだ6時半には兄弟のように、明朝7時半にミルクなしのコーヒーを私に持って来てくれ、おまえは寝に行つてよいと言いました。そして4日には、私の愛するご主人は変わり果てておられました。もうコーヒーも必要ではありませんでした。それというのも夜中、神様が彼をお召しになったからです。私の愛する主人を悲しみながら、当番兵たるあなたのマチアス・ロート。》

ヴィトゲンシュタインからも、それを確証する知らせが届いた。《私が哀れなトラークルの終わりについて、聞き知ったすべてはこうです。彼は私の到着3日前、心臓麻痺で死亡しました。この報告で、更になお詳細を問い合わせることは、私に抵抗がありました。何といたっても唯一の重要なことがすでに言われたのですから。》

1925年、トラークルの遺骨はチロルへ移された。彼は最後まで、その地を感謝の念で考えていた――〈なお一度、心からの挨拶を――チロルに、あなたに、そしてすべての親愛なる者に〉――そして10月7日インスブルックのミュラウ区の静かな墓地で、永遠の眠りにつくべく埋葬された。弔辞を読んだのはルートヴィヒ・フォン・フィッカーだった。

詩人の遺稿の中に、すでに一度言及した『ノヴァーリスに』と表題のついたあの詩が発見された。エアハルト・ブッシュベックが言ったように、この詩は奇妙な宿命に捕らわれた彼自身に当てはまるのである。そして墓碑銘として、彼の最後の憩いの場にふさわしいものであろう。

暗い地上に聖なる異邦人が憩っている。
彼の柔らかな口から神は嘆きを奪った
彼がおのれの花園で砕け散ったので。
一本の青い花となって
彼の歌は苦痛の夜の家で生き続ける。